

## 2015年度支部横断企画

### 「公開研究会 日本の映画音楽・映画音響研究の現在」報告記

柴田康太郎

2015年9月5日（土）、9月6日（日）の2日間にわたり、日本音楽学会 2015年度支部横断企画として「公開研究会 日本の映画音楽・映画音響研究の現在」（企画代表：柴田康太郎）を開催した。本企画は、早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点の公募研究「無声映画の上演形態、特に伴奏音楽に関する資料調査」（研究代表者：長木誠司）の共催によるもので、企画・運営も同公募研究の柴田康太郎、白井史人、紙屋牧子によって進められた。

1980年代以後、欧米を中心に進展してきた映画音楽・映画音響の研究は、近年日本でも音楽学、映画学など多ジャンルにわたり多角的に考察されるようになっていく。だが一方で各分野それぞれに考察が進められてきた結果、相互の交流が活発化せず国内での研究動向が捉えにくい状況にあった。本公開研究会が目ざしたのは、同分野の研究者に参加を呼びかけ、演奏家や作曲家もふくめた様々な参加者を交えて議論する場を設けることによって、あらためて映画音楽・音響研究の意義や可能性を捉えなおすことであった。

1日目は現代における無声映画伴奏のあり方に焦点を絞り、早稲田大学の小野記念講堂においてシンポジウムと参考上映をおこなった。このシンポジウムの背景には特に、2014年に早稲田大学演劇博物館へ収蔵された、600点以上ものサイレント期の映画伴奏譜資料の登場がある。「ヒラノ・コレクション」と呼ばれるこの資料は、実際に1920年代の日本の映画館で使用されていた楽譜資料としては、初めて研究者の前に公にされたものである。研究者と音楽家両方を交えた最初のシンポジウムではまず研究者の側から、柴田康太郎がこうした伴奏譜資料を現代に改めて演奏することの意義、問題、可能性を指摘し、次いで白井史人がこのコレクションの概要を報告したうえで同資料中の『軍神橋中佐』での伴奏曲の選曲実態を分析、最後に演奏家でもある今田が戦後の関西で活躍した大野政夫の実践を取りあげ、「囃子」という語を用いて欧米の「伴奏」と異なる日本におけるサイレント映画伴奏の特徴を考察した。次いで音楽家の立場から神崎えりがパリの映画館やパリ音楽院での経験をもとに、実演を交えて即興演奏に基づく自身の実践を紹介し、最後に作曲家の鈴木治行は映像を交えて電子音響音楽によるサイレント映画上映の実践を紹介した。議論のための時間が十分に取れたとはいいがたいが、それぞれの取りあげた具体的な論点からは、サイレント映画伴奏における歴史考証的な手法、即興演奏、電子音楽などの多様な手法のそれぞれがもつ特徴と魅力を浮かび上がらせるものであった。フロアからも指摘があったとおり、今後日本でもさまざまなアプローチで伴奏実践が進められる余地があることが再認識された。

シンポジウム後は、紙屋牧子による作品解説を挟んでから、「ヒラノ・コレクション」に専用の楽譜が残されていた『軍神橋中佐』を弁士・生演奏つきで上映した。

かつて国内で実際に使われていた伴奏譜の「復元」演奏としては国内初の試みであり、来場者からも好評を得た。もっとも、この楽譜は演奏上かなりの不確定要素をふくむものだが、それを補う湯浅ジョウイチ、丹原要の手際（楽曲の反復使用や伴奏パートのみの使用など）は、こうした楽譜資料の活用法のひとつを提示するものと言えよう。また弁士の片岡一郎の熱演は、あらためて研究者に、日本のサイレント映画伴奏と弁士の関係をいかに考察していくかという課題をも投げかけるものだったように感じられた。

2日目には東京大学駒場キャンパスへ場所を移し、2つの研究発表セッションと1つの書評会を行なった。午前中には「サイレントとトーキー」と題し、3つの研究発表がなされた。まず柴田は1930年代前半のサウンド版と呼ばれるサイレントからトーキーへの過渡期的な映画の形態を取りあげ、その独特の音響表現のあり方を分析した。次いで肥山紗智子はヒッチコックの『恐喝』と『第十七番』を取りあげ、初期トーキーにおけるサイレント期の常套表現の流入とそのパロディ的演出を考察し、最後に正清健介が小津安二郎の戦後の作品『彼岸花』における「オルゴール音楽」を考察し、サイレント期の映画伴奏との類似性を指摘した。また午後の研究発表セッションでは「音楽と映画」と題し、3つの研究発表がなされた。まず白井史人が1930年代の作曲家映画に注目して西欧的な作曲家像の流用のあり方を考察し、次いで紙屋牧子はこのプロパガンダ的音楽映画『ハナコサン』を取りあげ、「明朗」に歌うことと当時の日本社会の関係を浮かび上がらせ、最後に藤原征生は芥川也寸志作品における演奏会作品やテレビ用音楽、映画音楽などの転用のあり方を分析した。午前中のセッションは、サイレントとトーキーの関係を歴史的な影響関係、パロディ、表現上の類似性といった様々なレベルで考察するものであり、また午後のセッションは、「映画」と「音楽」の関係を、作曲家像、歌うこと、楽曲の流用関係というかなり異なった角度から示すものとなった。この2つのセッションは、改めて多ジャンルの研究者が集って多角的に考察することの意義を感じさせるものであった。

最後の書評会は長門洋平氏の『映画音響論』を取りあげたものである。柴田は本書が多様な分析手法を採ったことに対し、手法を絞ることで作品の特徴を示すような可能性を『浪華悲歌』を取りあげて分析、次いで白井は『赤線地帯』における十二音技法の分析をさらに丹念に分析すると別の解釈が生まれることを指摘し、最後に、木村建哉が映画研究の立場から本書の意義を述べたうえで、ハリウッド映画などとの関係、『赤線地帯』論分析にさらなる検討の余地があることを指摘した。長門はそれぞれに応答しながら自身の意図を丁寧に説明、さらに解釈の主観性をめぐり研究上の問題も提起していた。本書評会では書評と応答を通じて本書の読解が深めるだけでなく、複数の作品解釈の提示と議論によって、映画音楽・映画音響研究における作品分析の難しさとおもしろさも示すことができたように思われる。全体を通じ、参加者からは活発な質疑がなされ、充実した内容になったように思われる。ただ惜しむらくは2日間でのべ60名ほどしか参加者を得られなかったことであ

る。このことは運営面や告知の方法をふくめ企画者の反省点として残った。継続した催しを行う余地もあるため、今後の課題としたい。なお、運営面では早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点のスタッフを始め、ボランティアの学生の協力を得た。ここに感謝の意を表したい。

「公開研究会 日本の映画音楽・映画音響研究の現在」プログラム

9月5日（土）於：早稲田大学早稲田キャンパス 27号館小野記念講堂（B2F）

■ シンポジウム「現代の無声映画上映における音楽伴奏の可能性」（13：00～15:15）

登壇者 柴田康太郎（東日本支部、東京大学）：「無声映画伴奏の「現代」」

白井史人（東日本支部、東京医科歯科大学）：

「ヒラノ・コレクションからの「復元」の可能性

－1920年代半ば以降の日活直営館における既成曲の使用と『軍神橋中尉』配給譜」

今田健太郎（西日本支部、四天王寺大学）：「「囃子」としての活動写真和洋合奏」

神崎えり（作曲家・ピアニスト・即興演奏家）

鈴木治行（作曲家）

■ 参考上映『軍神橋中佐』（三枝源次郎監督、日活、1926年、東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵作品）（15：30～17:00）

弁士 片岡一郎

編曲・構成・ギター 湯浅ジョウイチ（カラード・モノトーン）

ピアノ 丹原要

作品解説 紙屋牧子（東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員）

9月6日（日）於：東大駒場キャンパス、18号館コラボレーションルーム1（4F）

■ 研究発表1：サイレントとトーキー（11：00～12：30）

発表者 柴田康太郎：「松竹のサウンド版映画における音楽／音響演出」

肥山紗智子（西日本支部、神戸大学）：

「1930年代初期のヒッチコック映画の音響表現に見るサイレント映画性」

正清健介（一橋大学）：「小津安二郎『彼岸花』におけるオルゴール音楽」

■ 研究発表2：音楽と映画（13：30～15：00）

発表者 白井史人：「1930年代日本の「作曲家映画」

－『荒城の月』と『世紀の合唱愛国行進曲』にみる国民意識」

紙屋牧子：「映画で／映画と歌う戦時下における映画と音楽」

藤原征生（京都大学）：「芥川也寸志の映像音楽における音楽語法の変遷歴史劇を中心に」

■ 書評会「長門洋平『映画音響論：溝口健二映画を聴く』を読む」（15：30～17：00）

書評 柴田康太郎

白井史人

木村建哉（成城大学）

応答 長門洋平（著者、国際日本文化研究センター）